

4. 平成17年度12年目経験者研修に関する アンケート調査分析

— 研修教員と大学教員に対するアンケート調査の結果とその分析 —

岐阜大学教育学部研修計画委員 山田雅博
同 尾高広昭

1. はじめに

昨年度に引き続き、岐阜大学教育学部で行われている現職教員対象の12年経験者研修について、研修教員と大学教員双方に対して無記名アンケート調査を行った。ここでは、その調査結果とその分析について述べる。研修教員対象のアンケートについては、質問項目を若干変更した。昨年度は無かった、職場において授業等について相談するか等の項目を新設した。また、岐阜大学教育学部の役割について明確にするため、大学教員に気軽に相談できる体制があればいいと思うか等の質問も行った。大学教員向けについては、昨年度と同じ質問項目とした。研修教員の回答者は271人、大学教員の回答者は71名であった。

研修教員に対する質問項目は、(1)～(11)までの11項目である。(1)～(10)までの質問項目は、当てはまる番号を1つ選んで回答してもらう選択式であり、(11)は記述式で自由に意見を書いてもらうこととした。また、大学教員に対する質問項目は、(1)～(9)までの9項目である。質問項目(1)～(4)及び(6)～(8)は、当てはまる番号を1つ選んで回答してもらう選択式であり、質問項目(5)と(9)は自由記述式である。

以下、2節において研修教員に対する選択式の質問内容とその結果を述べる。また、3節では、大学教員に対する選択式の質問内容とその結果を述べ、研修教員の結果との比較を行う。なお、記述式の回答については、様々であり、今後の研修のあり方についての参考意見とするにとどめ、ここでは触れないこととする。

2. 研修教員に対する選択式の質問内容とその結果

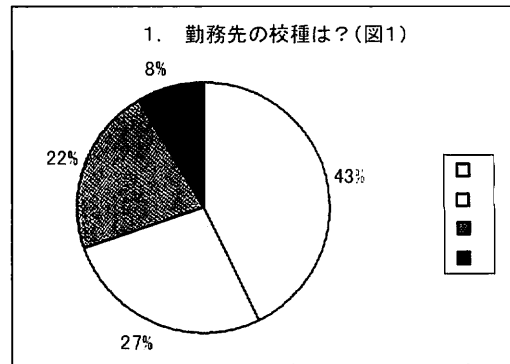
以下では、選択式(1)～(10)の質問ごとに、質問内容、選択肢、回答結果を示す図を示してある。なお、質問内容によって項目を分類し、【校種・研修コース】についてが(1)および(2)の項目であり、昨年度と同様の質問である。【教育現場環境】が(3)および(4)の項目であり、新設した質問項目である。【大学研修に対する期待・ニーズ】についてが(5)および(6)であり、特に(6)も新設した質問項目である。【大学研修における成果】についてが(7)および(8)。「大学について」が(9)および(10)となっており、これは昨年度とどのような質問である。以下、質問番号の順に述べていく。

【校種・研修コース】

(1) 勤務先の校種をお答え下さい。

1. 小学校 2. 中学校 3. 高等学校
4. 特殊教育諸学校

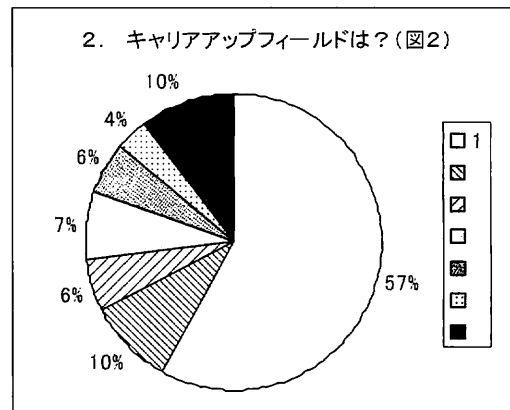
最初の質問である(1)は、勤務先の校種であり、これについては図1を参照して頂きたい。



(2) 研修を受けたキャリアアップフィールドをお答え下さい。

1. 教科教育 2. 特殊教育 3. 教育相談
4. 総合的学習 5. 児童生徒の発達理解
6. 学校改善 7. 学級経営・実践研究法

まず、研修教員の意識について分析する。質問(2)では、キャリアアップフィールドを尋ねたが、図2によれば57% (昨年度62%) の教員が教科教育を受けたと答えており、教科教育を受けた教員の割合が非常に大きい。これは、昨年度とほぼ同じ数字であり、研修教員の希望が反映されたのではないかと考えられる。

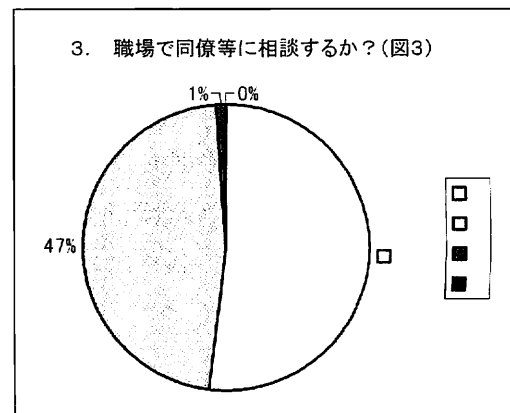


【教育現場環境】

(3) 現場での疑問点等について、職場の同僚や先輩等に相談していますか？

1. 頻繁に相談する 2. たまに相談する 3. あまり相談しない 4. 全く相談しない

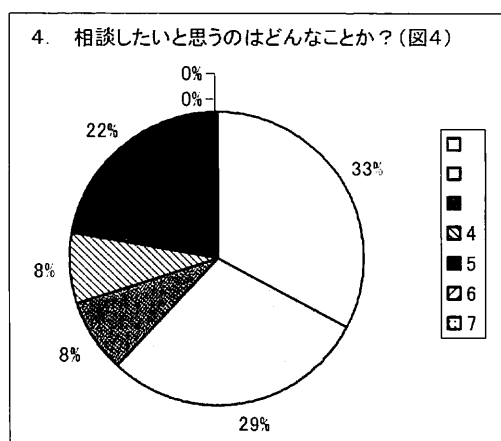
現場での疑問点等について、職場の同僚や先輩等に相談しているかという質問(3)について、回答結果である図3を見ると、合計99%の教員が、1. 頻繁に相談する、2. たまに相談すると答えており、殆どの教員が相談相手を持ちながら、仕事をしているようである。この数字が、12年目の教員らのものであることに注目したい。



(4) 現場での疑問点等について、誰かに相談したいと思うのは、どんなことですか？

1. 授業の力量に関する事 2. 学校づくり・学級経営に関する事
3. 学問的知識向上に関する事 4. 学校の直面する問題への対応力向上に関する事
5. 様々な児童生徒への理解に関する事 6. 特に何も無い 7. その他

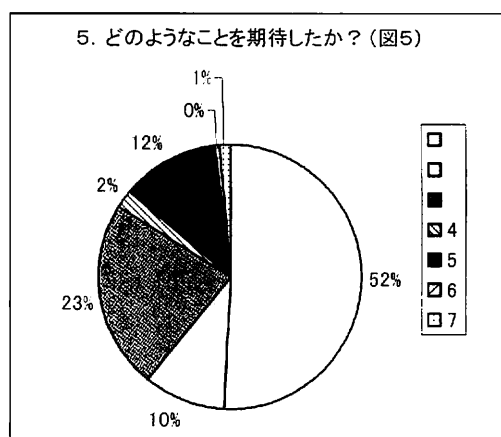
次にどのような疑問点について相談するかについて分析する。図4は、質問(4)に対する結果を表している。図4を見ると、33%の研修教員が、授業の力量に関すること答えている。また、29%の研修教員が学校づくり・学級経営に関することと答えている。研修教員の課題や関心は、授業の力量と学級作りであり、12年間を経験してもなお、常に疑問を持ちながら仕事を行っていることが解る。また、22%の教員が、様々な児童生徒への理解に関することと答えており、教育現場の難しさが現れている。



【大学研修に対する期待・ニーズ】

(5) 今回の研修に対して、どのようなことを期待しましたか？

1. 授業の力量を高めたい
2. 学校づくり・学級経営を考えたい
3. 学問的知識を高めたい
4. 学校の直面する問題に対応できる考え方を身に付けたい
5. 様々な児童生徒の理解
6. 特に何も期待していなかった
7. その他

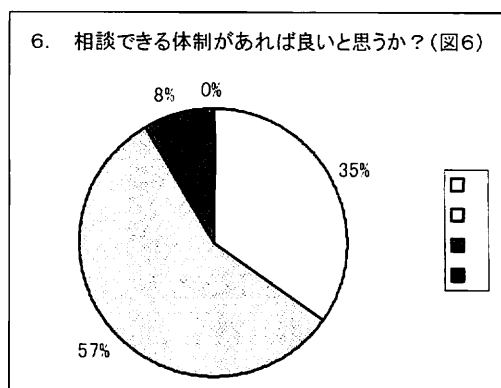


今回の研修に対してどのようなことを期待したかという質問(5)について、回答結果である図5を見ると、授業の力量を高めたいという回答が52%（昨年度59%）と最多であり、次いで学問的知識を高めたいという回答が23%（昨年度23%）と続いていることが分かる。これは、ほぼ昨年度と同様であり、我々が期待されているのは、現場に直接つなげられるような学問的知識の供給であろう。

(6) 現場での疑問点等について、大学教員に気軽に相談できる体制があれば良いと思いますか？

1. とてもそう思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない

現場での疑問点等について、大学教員に気軽に相談できる体制があれば良いと思うかとの質問には、57%が、2. そう思うと答えている。35%が、1. とてもそう思うと答えたが、2. そう思うが多いのは、積極的に大学を利用しようとはまでは思わないが、相談体制があれば、と考えているのではないだろうか。



【大学研修における成果】

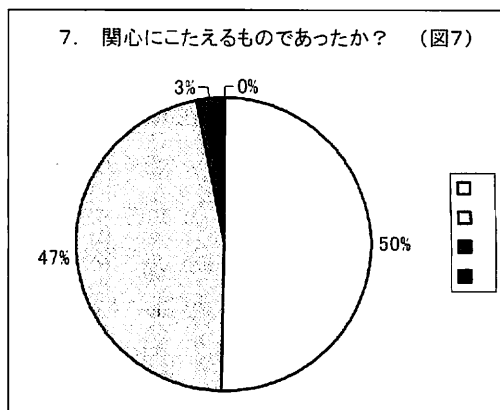
(7) 今回の研修は、自分の課題や関心にこたえるものでしたか？

1. とてもそう思う 2. そう思う 3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない

次に大学での研修における成果について分析する。

図7は、今回の研修が自分の課題や関心にこたえるものであったか、という質問(7)に対する結果を表している。

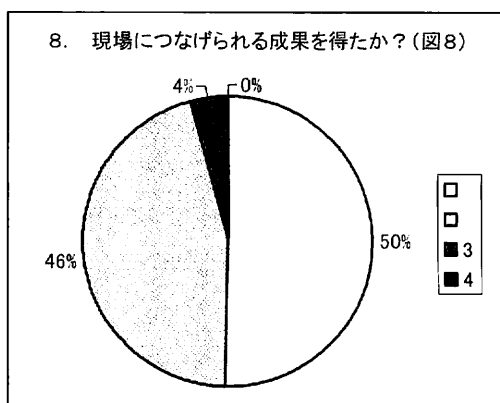
図7を見ると、50%（昨年度46%）の研修教員が、1. とてもそう思うと答えている。また、2. そう思うと答えた研修教員は、47%（昨年度51%）であり、昨年と比較してわずかだが、1. とてもそう思うと回答した割合が増えている。



(8) 今回の研修で、現場に直接つなげられる成果を得たと思いませんか？

1. とてもそう思う 2. そう思う 3. あまりそう思わない 4. 全くそう思わない

図7と図8の形がほぼ同じとなっている。質問(7)及び(8)に対して、ともにほぼ半数の研修教員が、とてもそう思うと答えているが、これらの傾向は、昨年度と殆ど変わらない。

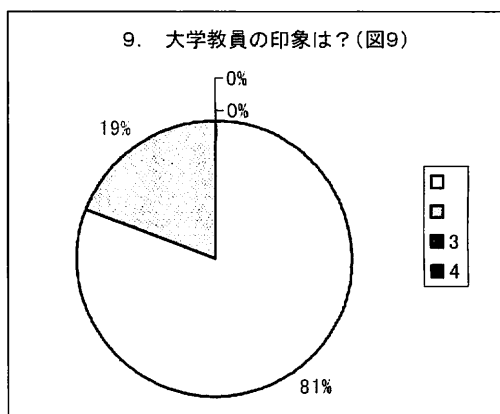


【大学について】

(9) 今回の研修を通して、大学教員に対する印象はどうでしたか？

1. 非常に良い 2. まあまあである 3. あまり良くない 4. 全く良くない

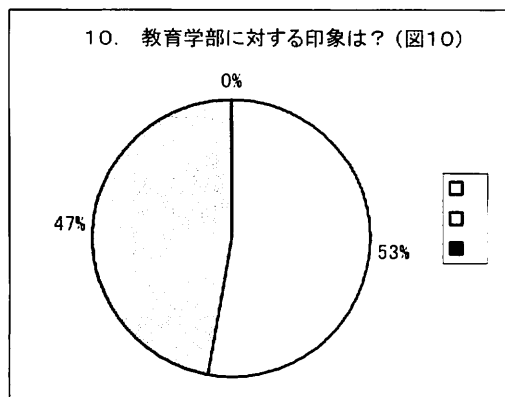
大学の印象について分析する。今回の研修を通して、大学教員に対する印象はどうでしたかという質問(8)に対して、図8を見ると、81%（昨年度78%）の研修教員が、1. 非常に良いと答えている。また、19%（昨年度22%）の研修教員が、2. まあまあであると答えており、少しずつであるが改善の傾向が見られる。



(10) 今回の研修を通して、教育学部に対する印象は変わりましたか？

1. 良くなった 2. 変わらない 3. 悪くなった

次に、今回の研修を通して、教育学部に対する印象は変わったかという質問（10）に対して、図10を見ると、1. 良くなったが53%（昨年度38%）で最多であった。また、2. 変わらないが47%（昨年度62%）であり、昨年度と割合が逆転している。これは、非常に興味深く、かつ好ましい結果である。



3. 大学教員に対する選択式の質問内容とその結果、及び研修教員の結果との比較

以下では、選択式の質問項目（1）～（4）及び（6）～（8）の質問ごとに、質問内容、選択肢、回答結果を示す円グラフを示してある。なお、質問内容によって項目を分類し、【研修コース】が（1）、【大学研修のねらい】が（2）、【大学研修の成果】が（3）、（4）および（5）、【大学研修の方法】が（6）および（7）、【研修教員の印象】が（8）、【研修全体】が（9）となっている。

【研修コース】

(1) 担当したキャリアアップフィールドをお答え下さい。

1. 教科教育
2. 特殊教育
3. 教育相談
4. 総合的学習
5. 児童生徒の発達理解
6. 学校改善
7. 学級経営・実践研究法

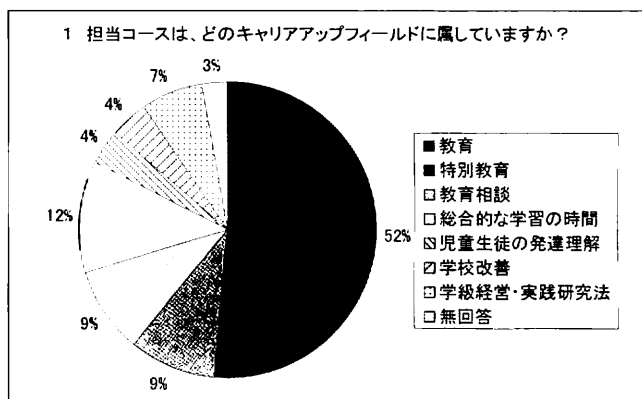


図1 担当した研修コース

質問（1）の「担当したキャリアアップフィールド」に対する回答結果を図1に示す。この結果より、52%（昨年度64%）の大学教員が教科教育を担当したと回答している。次いで、12%（昨年度11%）が総合的学習であり、教科教育を担当した大学教員の割合が高いことがわかる。

この結果の要因は、第一に研修教員の要望を考慮したため、第二に大学教員が12年目の現職教員に必要なキャリアアップフィールドを教科教育と判断したことが考えられる。

【大学研修のねらい】

(2) どのような期待やねらいを計画し、今回の大学研修のコース担当にのぞみましたか？

1. 専門的知識や情報を獲得させる
2. 子どもへの関わり合いを深める授業の力量形成
3. 教科の教材研究
4. 変わりつつある児童生徒に対応できる考え方の養成

5. 経験を積んだ教師のスタンスを問い直す契機
6. 教育現場の様々な課題を解決
7. 学校づくりや学校経営
8. 大学院志望の動機付け
9. その他

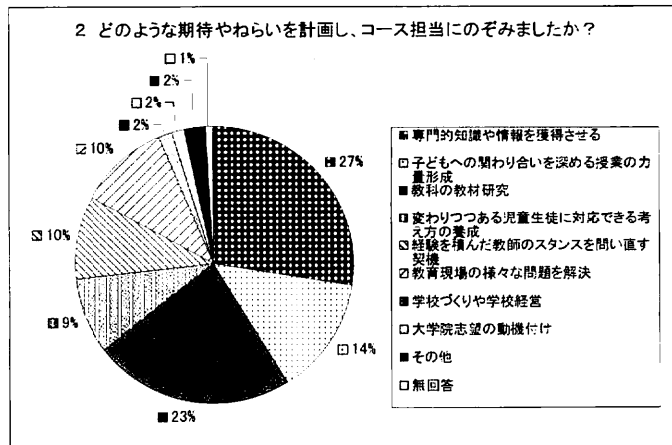


図2 大学教員の研修のねらい

質問(2)に関する、「大学教員の研修のねらい」に対する回答結果を図2に示す。これより、大学教員は研修のねらいを第一に27%（昨年度30%）が専門的知識を獲得させ、新しい情報を知らせること、第二に23%（昨年度24%）が教科の教材研究を挙げている。この結果と現職教員の結果より、大学教員と現職教員の期待やねらいはほぼ一致していることがわかる。

大学教員と現職教員は、学校教育の現場で活用できる知識や情報の獲得、教師としての力量形成を大学研修の目標としていた。

【大学研修の成果】

(3) 研修教員とのかかわりのなかで、教育や研究のために意味がありましたか？

1. とてもそう思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない

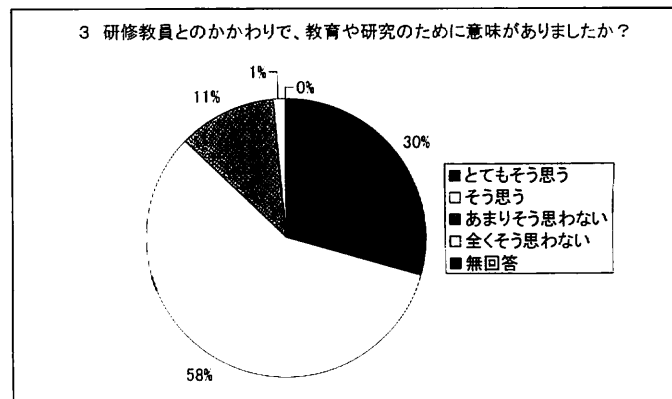


図3 大学研修の担当による意義

質問(3)の「大学研修の担当による教育や研究への意味」に対する回答結果を図3に示す。この結果から、30%（昨年度28%）がとてもそう思う、58%（昨年度64%）がそう思うと回答しており、全回答者の88%（昨年度92%）が「とてもそう思う」「そう思う」と大学研修の意義（教育や研究の意味）を評価していることがわかった。なお、大学研修を否定する「全くそう思わない」の回答は0%であった。

(4) 大学教員に対して、学校現場に直接
つなげられる指導ができましたか？

1. とても思う
2. そう思う
3. あまりそう思わない
4. 全くそう思わない

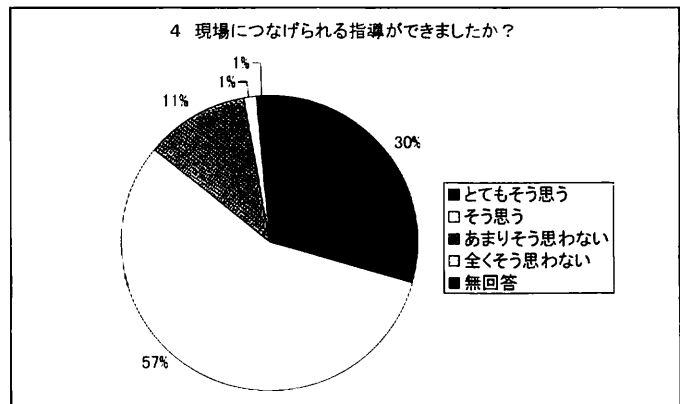


図4 学校現場につなげられる指導ができた

質問(4)の「学校現場につなげられる指導ができたか」に対する回答結果を図4に示す。指導ができたかに関しては、回答結果の30%（昨年度19%）が「とても思う」、57%（昨年度72%）が「そう思う」と回答した（昨年度と比較して、「とても思う」と回答した大学教員が五割ほど増加した）。大学教員は、昨年度の経験を活かしつつ自信の持てる研修を実施できたことが結果より推察できる。

研修教員の回答結果と比較すると、「とても思う」と回答したのは、指導した大学教員は30%、研修教員50%であった。この結果より、大学教員は自分の指導に関して厳しい自己評価をしていることがわかる。

ただし、学校現場につなげられる指導ができたについて「とても思う」「そう思う」と回答した大学教員は91%、研修教員は96%であった。

【大学研修の方法】

(6) 大学の設備・施設（附属図書館、ブラックボード、AIMS-GIFUなど）を利用しましたか？

1. 良く利用した
2. 時々利用した
3. あまり利用しなかった
4. 全く利用しなかった

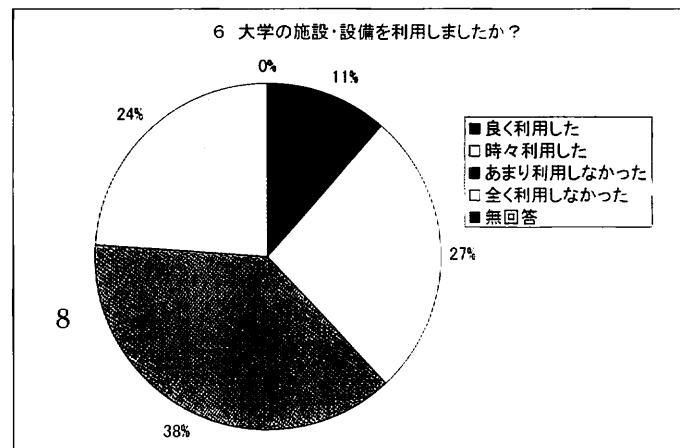


図5 大学の施設・設備の利用

質問(6)の「大学の設備・施設を利用したか」に対する回答結果を図5に示す。その結果、あまり利用しなかったが最多で38%（昨年度42%）、次いで時々利用したが27%（昨年度14%）、全く利用しなかったが24%（昨年度42%）である。昨年度の結果と比較すると、施設・設備を時々利用したとの回答が二倍に増加した点が注目すべき結果である。

岐阜大学の施設・設備の利用が増加したことは、大学教員の研修内容や研修方法の工夫及び12年目研修教員の探求心の向上が考えられる。

(7) 担当する研修教員の人数は、どのくらいが適当だと思いますか？

1. 1～3人
2. 4～6人
3. 7～9人
4. 10人以上
5. その他

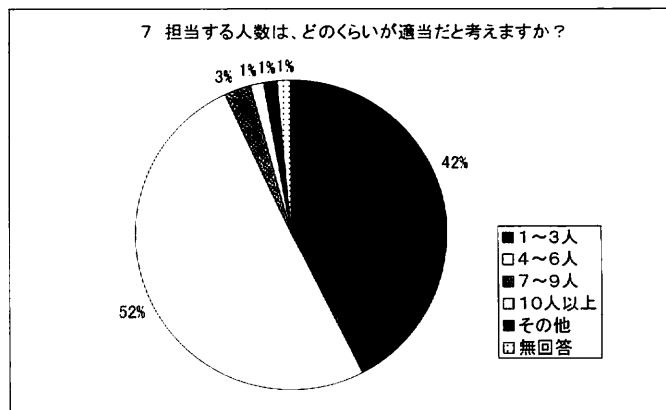


図6 担当する際に希望する研修教員数

質問(7)の「担当する研修教員の人数として適当と思われるのは何人くらいか」に対する回答結果を図6に示す。その結果、グループの研修教員数は、4～6人を適当とすると回答したのが52%（昨年度49%）、次いで1～3人を適当とすると回答したのが42%（昨年度11%）である。前年度の結果と比較して、研修教員数を1～3人と回答した大学教員が約四倍に増加したことが特徴である。大学教員は、研修教員との少人数指導を希望していることがわかった。

今後の課題点は、昨年度から引き続き「研修の効果を高めるための研修教員の最適な配属人数（配属教員数）の調整」である。

【研修教員の印象】

(8) 今回の研修を通して、研修教員に対する印象はどうでしたか？

1. 非常に良い
2. まあまあである
3. あまり良くない
4. 全く良くない

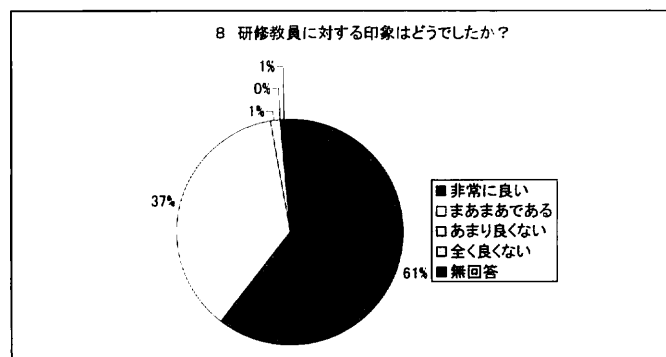


図7 研修教員の印象

質問(8)の「研修教員の印象はどうでしたか」に対する回答結果を図7に示す。この結果から、大学教員の61%（昨年度67%）が非常に良い、37%（昨年度28%）がまあまあであると回答している。

大学教員は、研修教員の研修姿勢を良い印象で捉えていた。

4. 終わりに

12年目経験者研修は、今年度で3年目である。昨年度に引き続き、我々が分析を行うこととなった。これらの客観的な資料を参考にして、より良い研修のあり方を探っていければと考える。今後は、岐阜大学教育学部の役割もさらに多様化し、様々な分野での貢献が求められるであろう。それらの中でも、岐阜県教員の教育と質の向上という分野は大変重要なものであると考えられる。12年目経験者研修については、教員の資質向上のために特に重要であり、分析に基づいた改善を絶えず行っていかなければならない。